



若い頃から様々なスポーツに挑戦していた宮川。(左)車椅子バスケットチームの仲間とともに出場した白根桃源郷マラソン(現・南アルプス桃源郷マラソン)宮川は前列右。(右)スキューバダイビングのライセンスも取得している(宮川は左)



過去に股関節を固定する手術を受けたため、屈むために右足を後ろに折り曲げたプレースタイルが特徴の宮川。「世界を目指すには、何試合もこなすための体力をつけなければ」と話す宮川。オフシーズンにはウエイトトレーニングを予定している

「チーム山梨」の精神的支柱に チェアカーリングへの転向

2004年1月、第1回世界車椅子カーリング選手権がスイスで開催。同年11月には第1回日本車椅子カーリング選手権大会が

出場することはできなかった。その後、「もっと色々なスポーツがしたい」と、車椅子バドミントン、車椅子テニスにも挑戦。さらにかねてより興味をいだいていたスキューバダイビングにも挑む。実は宮川、障がい者でありながらスキューバダイビングのライセンスを取得した日本人初の車椅子ダイバーでもある。

「もともと海が大好きで、ダイビングに興味を持っていました。ダイビング雑誌を読んでは、ライセンスが取れないかとあちこちのスクールにあたっていましたが、『障がい者だから』と断られ続けてきた。海外だったら車椅子でもライセンスを取得できるのに、日本は遅れていました。悶々としていたある時、日本でも障がい者がダイビングライセンスを取れる施設を作るというニュースが届きました。確か僕が30歳の頃だったと思います。嬉しくてすぐに電話をし、ライセンス取得のために動きまわりました」

開催された。初回の参加は「信州チェア」と「埼玉チェア」のたった2チーム。それを見学していた山梨県カーリング協会の米谷政長現「チーム山梨」コーチは、「山梨県に日本代表チームをつくれるかもしれない」と奮い立ち、メンバー集めを始める。そして、車椅子バスケのプレーヤーだった宮川に白羽の矢を立てた。

「米谷コーチに日本選手権のビデオを見せられ、『今、国内に2チームしかないらしいよ。2回勝てば、日本代表になれるよ』と誘われました。スポーツで高みを目指している以上、やはりJAPANのユニフォームは憧れ。山梨の車椅子バスケはいつも予選で負けてしまっていたこともあり、日本代表とは程遠かった。『日本代表を目指す』という夢を抱いてカーリングをはじめました」

その後すぐ、米谷コーチ、スキップの小川貞男選手らと日本一を目指す車椅子カーリング「チーム山梨」を発足。2005年



練習後には揃ってご飯を食べに行き、カーリング談義を行うことも一つの楽しみという「チーム山梨」のメンバー。左から小川貞男選手、大野美紀選手、依田華音選手、宮川。選手はあと2名いて、米谷コーチ、植松マネージャーの8名で活動している

1月に行われた第2回日本車椅子カーリング選手権大会に出場し、成績は参加3チーム中3位だったが、「チーム山梨」が産声をあげた瞬間だった。それから12年。「結局まだ日本代表になれていません」と豪快に笑う宮川。続いてメンバー全員で笑い合う。米谷コーチ、宮川、小川の初期メンバーに加え、「チーム山梨」は現在8人。元々サッカーをしていたというサードの大野美紀選手、昨年4月にチームに加わったという最年少依田華音選手、カーリング経験のあるマネージャー植松友香さんなど、この日練習に集まっていたメンバーだけでも年代や「チーム山梨」に至る背景はバラバラ。しかし、テンポ良く会話が弾み、サポートしあいながら準備や片付けをする様子からはチームワークの良さがうかがえる。

「チームの目標は日本一、そしてパラリンピック出場です。パラリンピックの出場はもちろん簡単ではない。行こうと思っただけ